

天地を創造された神

加藤 享

【聖書】創世記1章1～31節

初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である。

神は言われた。「水の中に大空あれ。水と水を分けよ。」神は大空を造り、大空の下と大空の上に水を分けさせられた。そのようになった。神は大空を天と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第二の日である。

神は言われた。「天の下の水は一つ所に集まれ。乾いた所が現れよ。」そのようになった。神は乾いた所を地と呼び、水の集まった所を海と呼ばれた。神はこれを見て、良しとされた。神は言われた。「地は草を芽生えさせよ。種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける果樹を、地に芽生えさせよ。」そのようになった。地は草を芽生えさせ、それぞれの種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける木を芽生えさせた。神はこれを見て、良しとされた。夕べがあり、朝があった。第三の日である。

神は言われた。「天の大空に光る物があって、昼と夜を分け、季節のしるし、日や年のしるしとなれ。天の大空に光る物があって、地を照らせ。」そのようになった。神は二つの大きな光る物と星を造り、大きな方に昼を治めさせ、小さな方に夜を治めさせられた。神はそれらを天の大空に置いて、地を照らせ、昼と夜を治めさせ、光と闇を分けさせられた。神はこれを見て、良しとされた。夕べがあり、朝があった。第四の日である。

神は言われた。「生き物が水の中に群がれ。鳥は地の上、天の大空の面を飛べ。」神は水に群がるもの、すなわち大きな怪物、うごめく生き物をそれぞれに、また、翼ある鳥をそれぞれに創造された。神はこれを見て、良しとされた。神はそれらのものを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、海の水に満ちよ。鳥は地の上に増えよ。」夕べがあり、朝があった。第五の日である。

神は言われた。「地は、それぞれの生き物を産み出せ。家畜、這うもの、地の獣をそれぞれに産み出せ。」そのようになった。神はそれぞれの地の獣、それぞれの家畜、それぞれの土を這うものを造られた。神はこれを見て、良しとされた。神は言われた。「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」神は言われた。「見よ、全地に生える、種を持つ草と種を持つ実をつける木を、すべてあなたたちに与えよう。それがあなたたちの食べ物となる。地の獣、空の鳥、地を這うものなど、すべて命あるものにはあらゆる青草を食べさせよう。」そのようになった。神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。夕べがあり、朝があった。第六の日である。

【序】 神さまなんて

私たちの子どもがまだ小学生だった頃、小学校の卒業式で、私はPTAを代表して卒業生にお祝いを述べました。「誰でも経験することですが、大きくなるにつれて**誘惑**も強くなっていきます。すると心の中に、こんな**ささやき**が聞こえてきます。1. 誰も見ていないよ 2. みんなもしているよ 3. 一回くらいなら、たいしたことないよ。そして、その声について負けてしまうのです。

この三つのささやきの中で一番こわいのは、『誰も見ていないよ』です。でも神さまは、いつでもどこでも、ちゃんとみていらっしやいます。皆さんも**神さまを恐れて**、この一番強い誘惑に打ち勝つ人になって下さい。

学校の先生たちは「良い話を有難うございました」と喜んで下さいました。でも子供たちは違ったよ

うです。我が家の5年生の娘の教室では、戻ってくるなり幾人かの男の子が、「**神さま**が見ているだ**ってさ**」と口々に言ったそうです。

「**神さま**なんているもんか。だって見えないじゃないか」。これは、子供たちだけではありません。日本人の大人もそう思う人が多いようです。ですから大人の間でも、**神**という言葉をお口にすることが、何となく**気恥ずかしい**思いになります。神を信じて生きるということは、普通の人とは違う**風変わりな人間**になることなのではないでしょうか。

[1] 八百万の神々

日本の一番古い歴史書は「古事記」(紀元 712 年)です。江戸時代の国学者**本居宣長**(モトオリノナガ)がその注解書「古事記伝」48 卷(1798 年)を著しました。これは日本の古代文書研究において**最高峰の研究書**とされています。

そのなかで宣長は「日本人にとって**神**とは、人であれ鳥であれ虫であれ、木や石であれ、**尋常**ただならぬものを言う」と述べています。**尋常**ただならぬものとは「**格別にすぐれているもの**」ということでしょう。格別に優れたものなら、人間ばかりでなく、鳥や虫、木や石でもみな神としてたてまつるのが日本人の心だと言うのです。ですから日本では神を「**八百万(やおよろず)の神々**」といい、非常に数多い存在となっています。

人間の中で格別に**優れた人**が神として祀られます。「**天神さま**」は**菅原道真**を祀ったものです。彼は右大臣の地位を追われ、九州の大宰府に流され、無念の死を遂げました(903 年)。すると京都に大きな雷が落ちて御所が焼けてしまったので、道真の祟りだと皆が恐れ、彼を**天の神**として祀り上げることで、霊を慰めようとなりました。道真は優れた学者でもあったので、後に**学問の神**として信仰されるようになり、各地に神社が建てられました。若い人の中には、入学試験の合格祈願のために、**天神さま**のお札の世話になった人も多いでしょう。

またお稲荷さんで親しまれている**稲荷神社**は、稲の霊、穀物の霊を神格化して祀られています。**狐**がお使いとして仕えています。この狐の好物が**油揚げ**なので、油揚げの袋に寿司を詰めた**いなり寿司**が奉納されます。**稲作農業**と共に日本各地に広まりました。

靖国神社は、明治以降の戦争で国に殉じた戦没者を英霊として祀っています。戦争中、小学生の私は、毎月8日、池袋の学校から歩いて参拝させられました。

千年杉と呼ばれる古い杉の大木や大きな岩が、しめ縄をはられて拝まれます。伊勢の二見ヶ浦の**夫婦岩**にも大きなしめ縄が張られて拝まれていますね。こういう神信心は、すべての物に**靈魂**や**精霊**(spirit)が宿っているという考えから生まれたものではないでしょうか。特別な人や特別な生き物・自然に宿っている**靈魂**や**精霊**には**特別な力**があるので、怒らせると祟りがあり、良い関係を結べば護って頂けると考えるのですね。

しかし信心の対象が、人であったり自然界の物なので、今日の私たちには、そのような神々を心から信じることに、何かしら**ためらい**を覚えるのではないのでしょうか。また**ご利益**を期待して祈願する程度の**神信心**なので、内心の気恥ずかしさがあるのかもしれませんが。

もう一つ、日本人にとって**宗教を敬遠する理由**として、オウム真理教などの**カルト**と呼ばれる集団の所業に対する**嫌悪感**があると思います。優秀な医者や科学者たちですら、はまり込んでしまうとサリンガスを製造して、あんなに恐ろしい行為をしてしまう。宗教にはそのような**魔性**があるから、はまり込まないようにという**警戒心**が、社会に強く働いていることも否めません。

[2] 天地創造の神

それに対して聖書は「**初めに、神は天地を創造された**」という言葉をもって書き始められています。光も闇も、空も地も海も、太陽・月・星も、鳥も植物も動物、海の生き物、そして人間も、すべてのものが、神によって創造された。**神は実に天地万物を創造なさった方だ**という**宣言**から始まります。

人間、生き物、自然物がどれほど尋常ただならざるものであっても、それらは皆、神によって創造されたもの、被造物に過ぎず、神ではないという宣言ですね。ですから神は、他の一切のものとは**全く質を異にするお方**なのです。他と比較して尋常ただならざるものだから、神として拝もうという、**私たち人間の判断**が働いて神になるのとは全く違うのです。私たちの考えで神が造られていくのではなく、**初めから神が存在**していて、神のお考えに基づき、神の力によって、**全てのものが造られ**、私も今このように存在しているのです。

「では、その神は誰がつくったの」と子どもは尋ねます。神を造ったものはいません。神は世界の住民の第一号ではありません。すべての**初めから神として存在**し、世の**終わりまで全世界・全宇宙を支配**し続けておられる**唯一のお方**が、神なのです。この大きな大きなお方を、この小さな私たち人間の目で見、知ることが出来るのでしょうか。

[3] 光あれ

神が創造の業を始めようとされた時、神の前に広がっているのは、**闇**、混沌の象徴である**深淵**、**水**という表現でしか言い表せない状態、即ち全く希望も期待もあり得ない、混沌とした**絶望的な状態**でしかありませんでした。神はこの絶望のただ中に向かって、「**光あれ**」と命じられたのです。**希望の光**を放たれたのです。光なしには太陽も月も星も輝くことはできません。この暗黒と混沌の世界に、**命と希望をもたらす光**を、神は真先に創造されたのでした。

神は光を**昼**と呼び、闇を**夜**と呼んで、混沌を**秩序のある世界**へと導かれました。そして次に大空を造り、水を大空の上と下に分け、下の水を集めて**海と陸**を造られました。そして陸に**草木**を生えさせ、その上で神は大空に**光る物**、即ち**太陽と月・星**を造り、昼と夜を治めさせたのでした。

ここでオヤツと思うのは、**太陽**と**月**という言葉が意識的に使われていないことです。どうしてでしょうか。それは、創世記が書かれた時代に、人類は既に**太陽**も**月**も**神**として**崇める風潮**が、世に広まっていたからだろうと、研究者たちは述べています。

例えば、紀元前18世紀にバビロン帝国の王になった**ハムラビ**は、**太陽神**から王の権威を与えられました。エジプト王朝の**ファラオ**も、**太陽神**の子とされています。日本でも、**天皇**は**太陽**を神とする**天照大神**の子孫として崇められてきました。そこで創世記を生み出した信仰者たちは、**太陽**も**月**も、**神**によって造られた単なる**光る物**でしかないことを、明確に言い表したのでしょう。

[結] 私たちの罪深さ

最後にもう一つ、この神の天地創造の業で、私が深く**心を打たれる言葉**を述べさせていただきます。それは創造の御業の最後に、**神が人間に語られた言葉**、29～30節です。「見よ、全地に生える、種を持つ**草**と種を持つ**実をつける木**を、すべてあなたたちに与えよう。それがあなたたちの**食べ物**となる。地の獣、空の鳥、地を這うものなど、すべて命あるものには、**あらゆる青草**を食べさせよう」。

神は、天地万物の創造の業の最後に、**ご自分にかたどって私たち人間**を創造して、すべての生き物を**支配する大切な任務**をお与えになりました。そして**食べ物**としては、全地に生える草や木の**実**を与え、また他の生き物には、**青草**を**食べ物**としてお与えになりました。すなわち命ある生き物はすべて、**草や木の実**を食べて生きていくように、創造されたのでした。

ところが現在、私たち人間は、**穀物**や**木の实**だけでは満足しなくなり、牛や羊や豚や鶏、また海の様々な魚介類を食べあさって、毎日を生きているのです。そのために酪農家たちは、家畜たちを我が子のように大事に育てながらも、それを食糧用に売りに出して、自分たちの生活を営んでいます。漁師たちも危険を冒して海中の魚介類を漁って、私たちに提供し、自分たちも暮らしています。

聖書では、このような**食生活の崩れ**は、**ノアの洪水の後**になってから始まったのだと記されています。神は地上に**人の悪**が増し、**不法**が満ちるのに心を痛め、遂に大洪水を起こして悪を一掃することを決意されました。しかし**ノア**だけは神の御心を信じて、大きな**箱舟**を造り、家族と動物、鳥と共に避難して、生き延びました(6章以下)。そして**ノア**一家以外の全てのものが滅んだ後で、神は新しい御業を開始するに当たって、このように語られました。

「人が心に思うことは、**幼い時から悪いのだ**。私はこの度したように、生き物をことごとく打つことは、二度とすまい」(8:21)。「動いている命あるものは、すべてあなたたちの**食糧**にするがよい。わたしはこれらすべてのものを、**青草**と同じようにあなたたちに与える」(9:3)。

すなわち他の生き物の命を奪って暮らしている現在の**私たちの食生活**は、**私たちの罪深さ**の結果、

神がやむなく譲歩して認められたものだという聖書の信仰です。私たちはこのことを、深く自覚しているでしょうか？「我々人間は万物の霊長なのだ」という思いに安住し、他の生き物の命を奪って、己の食欲を満たして、生きているのではないのでしょうか。

私たちは、どんな命をも大切に、尊ばなければなりません。**他の命を奪い、自分の命を養う罪深さを、もっと真剣に自覚しなければならない**と思います。せめて食事の度毎に、生き物の命を粗末にせず、感謝しつつ頂いて、健康を維持し、その**償いの生涯**を歩んで行かなければいけないと、思われます。皆さんは如何、お思いですか？

神は私たちの罪深さを、贖い清めるために、イエス・キリストとなってこの世に来て下さり、ご自身の十字架の死をもって、罪を贖い、罪を赦された者として、**謙遜に愛し合って生きていく救い**を、もたらして下さいました。神が創造されたこの世界を、**美しいものとして管理していく責任**を、しっかりと果たしていきたいものです。

祈ります：神さま、あなたは天地万物を、非常に良いものとしてお創り下さったことを、感謝いたします。しかしその管理を託された私たち人間が、造り主であるあなたの御心を顧みず、互いに争い殺し合うばかりか、他の生き物の命を奪って、自分の食物にしてしまう罪をも犯すようになってしまいました。あなたが極めて良いものとして創造された世界を、弱肉強食の世界にしてしまいました。私たちでも悲しくなる世界です。あなたはどれほど悲しんでおられることでしょうか。あなたは、主イエスを通して、互いに愛し合いなさい。弱いもの、小さなものをいたわりなさいと呼びかけて居られます。その愛を私たち一人一人の心に、増し加えてください。愛の御霊を注いでください。世界に平和がもたらされるように、私たちをお導きください。救い主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。　　アーメン